

イギリス



© Clive Baroda

グレアム・ケイ
Graeme Kay
中矢一義・訳

マックス・レーガーの秘められた魅力

偶然の一致ですが、ローマ教皇ベネディクト16世の辞任から、その本名ジョゼフ・ラッツィンガーと同人作曲家のマックス・レーガーについてわたしが進めている仕事へと至って、レーガーが離婚歴のある女性と結婚したことで、1902年カトリック教会破門の憂き目に遭っていたという、今となっては驚くべき事実を思い起こしました。

レーガーは、そのことでストレスを感じなかったかもしれませんが、すでに多くの悩みを抱え、悲しみをまぎらすことに慣れていた人間でしたから、そうした悲しみのほとんどは、兵役によって、さらには、才能の点からいえば、生まれ育ったドイツのオーパーファルトという小さな池の「大魚」であったことから生じた、若き時代の職業的欲求不満によってもたらされた結果でした。神経衰弱になったレーガーは、1898年ヴァイデンの実家に戻り、そこで回復すると、演奏と作曲を続け、ついに1901年家族を説得して、音楽的刺激がより豊かなミュンヘンに移住したのでした。そして教職と音楽家としての職に相次いで恵まれ、最後は、マイニンゲンの宮廷音楽監督とライプツィヒ王立音楽院教授にまで

のほりつめました。43歳のとき、イエナの自宅からライプツィヒの職場に向かう途中、心臓麻痺で亡くなります。

「一般市民」というのは、演奏会に連う一般人という意味ですが、一番よく知られたレーガーの作品は、「モーツァルトの主題による変奏曲とフーガ」ですが、室内楽曲と合唱曲も数多く手がけていま



[Fugatto FUG041 (2枚組)]

す。しかしオペラと交響曲に手を染めることはありませんでした。

わたしが「一般市民」といったのは、よほどの音楽通でなければ、レーガーを否定する人たちは黙らせ、彼に名声をもたらしたのは、膨大な数にのぼるオルガン音楽だったという事実を、知らないだろうと考えたからです。彼はフイツツ

ナー、ブゾーニ、ヴォルフフエラーリ、フランツ・シュミット、ツェムリンスキといった、第二次世界大戦後にその作品の多くが忘れ去られてしまったものの、戦後の楽界における過剰な偶像破壊主義が終わったあと、名声が回復した世代の作曲家に属しています。しかし、わたしのようなバッハを敬愛する人間にとって、レーガーはロマン主義がもたらしてくれた大いなるボーナスです。レーガー自身がバッハに寄せていた敬意は、彼の想像力によって新たに再生された幻想曲、トッカータ、フーガ、トリオ、コーラル前奏曲に、さらには、ワーグナー以後の領域へと際限なくはまり込んでいった《グレの歌》以後のシェーンベルクとは異なり、きちんと調性の枠のなかに留まっている、ブラームスの影響を受けた和声構造に表れています。

レーガーの創意に富んだ複雑さと、和声的に屈折した終止法を好む傾向は、音楽通ならぬ人たちにとっては、障壁となりかねません。しかし真の音楽通にとつて、そうした狡猾な対位法や、一筋縄ではいかない終止法は、空疎なレトリックではありません。そして表面の細部がどれほど眩惑的のものであっても、レーガー

の場合は、ワーグナーの場合と同様、しばしば底に秘められたプランがあって、建築家のコンピューター・シミュレーションのように、徐々に底から湧きあがってきて、やがては構造物全体を明らかにするので。その音の響きによって。

フガット・レーベルは8巻16枚からなる「レーガー・オルガン作品集」に着手しました。使用されるオルガンには、この作曲家の時代の音響にふさわしいものが選ばれています。これまで4巻が発売されていますが、ちよつと試してみたいという人には、第1巻と、第3巻をお勧めします。前者には大規模な幻想曲とフーガが4曲、それに2巻からなるきわめて多様な附随音楽が、後者には、みことなまでに複雑で充実した6曲の《コーラル幻想曲》と、一連の《コーラル前奏曲》が収められています。レーガーの擁護者たるイタリアのオルガン奏者ロベルト・マルティーニによる確信にあふれた演奏は、いかなる点からも、基準となる出来映えです。